

東京バッハ合唱団 月報

[第 625 号] 2014 年 7 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp <http://bachchor-tokyo.jp/>

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 625

July 2014

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

3.11 被災地に贈る

バッハのクリスマス音楽の花束

第 111 回定期演奏会(2014 年 12 月 13 日)予告

創立 50 周年を記念する特別企画(4 大作品連続演奏、全 5 公演、2011 年 12 月～2014 年 3 月)を終えて、新たな半世紀の、普段どおりの公演活動が再開されます。その間に、2011 年 3 月の東日本大地震と大津波と、今にいたるも収束のめどのない東京電力の原発巨大事故が起きました。

■ 3.11 以前と以後

直後には、日本の社会にとって、3.11 の以前と以後とが、それこそ歴史の巨大な断層となるだろう、あるいはなるべきだ、という論議が大いに交わされたものでした。3 年をへて、断層はどうなっているのでしょうか。何が変わらないままであるか、あるいは何が変えられようとしているか、じっくり見定めながら日々を送らねばならないようです。

東京バッハ合唱団にとっては、奇しくもその 3.11 が、これからの新たな歩みの起点となりました。今後しばらくは被災地の方々と、さまざまな形での連帯を意識しながら、ひとつひとつのプログラムが組み立てられていくことになるでしょう。来年の夏の、南相馬(福島県)への訪問演奏も企画にあがっています。唐突ですが、東京バッハ合唱団と東京電力株式会社。知らずのうちに、東京という巨大市場と巨大消費の空気に染まった衣をまとっているのであれば、われわれは新たな衣に着替えて、バッハの音楽を待っていてくださる、日本国中のファンの方々に、真正のバッハをお届けしたいものです。真正のバッハ? みなさんと一緒に探しつづけます。

最初の一步が、本年クリスマスシーズンの第 111 回定期演奏会です(次ページに概要の紹介)。「バッハのクリスマス音楽の花束」と名づけました。

■ 曲目の魅力、まるで花束

- ・《マニフィカト》4つの挿入曲
- ・カンタータ第 97 番《わがすべてのわざ 主に導かる》
- ・カンタータ第 62 番《いざ来たりませ 世の救い主》
- ・カンタータ第 36 番《喜びのぼれいと高き星に》

この 4 曲をならべてみて、ある団員が、これはまる

でバッハのクリスマス音楽の花束だ、と言ったのでサブタイトルが決まりました。以下の日本語歌詞は、当団ホームページからご参照ください(上掲)。

(1) 《マニフィカト》4つの挿入曲

バッハには、典礼聖句「マニフィカト」(マリアの讃歌、ルカ 1:47-55、ラテン語訳)に作曲したものが 2 稿残されています。第 1 稿は 1723 年のクリスマス用に準備されたもの(変ホ長調、BWV243a)。後に「マリアのエリサベト訪問の祝日」用に改稿されたもの(第 2 稿、1733 年、ニ長調、BWV243)がよく演奏されますが、第 1 稿には「マニフィカト」本体のなかに、当時の人びとに愛唱された 4 つの小曲が挿入されて、クリスマスの喜びが直接的に表現されています。今回は、これらの挿入曲のみを取り上げます。

挿入曲 A) 高きみ空より: クリスマス・キャロルとして有名なルター・コラーレのカノン風編曲。天使の羽ば



■ 第 111 回定期演奏会チラシの挿図(部分を使用)
ギルランダーヨ「キリスト降誕」1492 頃
(板にテンペラ、45cm×42cm、ヴァティカン蔵)
Web 上でもご覧ください: [東京バッハ合唱団]→[月報]→[最新号]

たきを思わせる下3声の上に、ソプラノが軽々と定旋律を歌います。通奏低音のみの奏譜。

挿入曲B) よろこび歌え：降誕の喜びに胸おどる 4声部合唱 (S1/S2/A/T)。バス声部をはぶいて、子どもたちの素朴さを表現。通奏低音が喜びの動機を奏でつづけます。ドイツ語歌詞はバッハの100年ほど前のトマス・カントルの作品とか。

挿入曲C) グローリア：クリスマス聖句の定番中の定番(ルカ2:14,15、ラテン語訳)。今回のチラシの挿画(前ページ)で天使たちが掲げる巻物は、まさにこの部分が開かれています。「いと高きところには栄光、神にあれ」にあたる句で、「地には平和、御心に適う人にあれ」と続くことはご存じのとおり。5声部合唱 S1/S2/A/T/B は天使の数?

挿入曲D) エサイの花なる：イザヤ書11:1の「エッセイの株からひとつの芽が萌えいで、その根からひとつの若枝が育ち」から派生したラテン語歌詞ですが作者は不詳、古くからクリスマスに歌われていたようです。「エサイ」はダヴィデ王の父、つまりキリストのご先祖と伝えられていました。S/Bのカノン風二重唱。

(2) カンタータ第97番《わがすべてのわざ 主に導かる》

バッハの新作カンタータの記録をほとんど見る事のなくなった1734年の初演です。用途が特定されていませんが、フランス風序曲での開幕は、この作品の初演が三位一体節後第5日曜日の礼拝だったとすれば、〈主に導かる〉の、〈主〉(原詞では「至高者」)の登場を告げると解釈できましょうし(この日の福音書はルカ1:1-5、「彼ら(ペトロら漁師)は、すべてを捨ててイエスに従った」、結婚式の礼拝であったとしても、その華やかさは、今回のクリスマス・コンサートの祝

祭性にまったくふさわしいものです。

アリアもレチタティーヴォも全9楽曲すべてが、コラール詩節をそのままテキストにしています。この高度な作曲技術はバッハ後期ならではと言えましょう。ところどころのコラール旋律が印象に残るのは、バッハが《マイ受難曲》でも《ヨハネ受難曲》でも、大事な場面で歌わせたものと同旋律だからか。

因みに、この第97番と次の第62番は、当合唱団出版局の久々の新刊楽譜による上演です。いずれも、バッハ・カンタータ中の白眉であるにもかかわらず、まだまだ日本では知られていません。これを機に両カンタータが定着することを願っています。

(3) カンタータ第62番《いざ来たりませ 世の救い主》

待降節の最初の日曜日のためのバッハの作品は3曲残されていて、いずれもM・ルターの待降節コラール「いざ来たりませ」を骨組みとしたもの(BWV61、BWV62当曲、BWV36次の曲)。若き日のバッハによる第61番(同名、1714年ヴァイマル初演)も広く愛好されていますが、ライブツィヒ期2年次(1724年)、カンタータ黄金期の第62番は、技巧的にもより円熟味を増して、味わいの深い名曲。「いざ来たりませ」は、古くから愛唱されたラテン語聖歌のドイツ語への翻案であり、日本でも讃美歌やオルガン曲としてよく知られています。その旋律が、冒頭のコラール合唱と終結の4声体コラールで歌われます。

(4) カンタータ第36番《喜びのぼれ いと高き星に》

待降節カンタータの名曲です。第1部：合唱-コラール-アリア-コラール、第2部：アリア-コラール-アリア-コラールという珍しい楽曲構成は、某教師の誕生日祝賀用の稿に始まり、待降節のための教会稿にいたるまでの、なんどかの変遷の事情を伝えているようです。上記のルター・コラールが第2、6、8曲目に登場します。ただし、中央(第4曲)のみは、フィリップ・ニコライの「輝く暁の星のいと美わしきかな」“コラールの女王”が朗々と歌われます。3つのアリアは佳品ぞろい、ご堪能ください。

■音響抜群、クラシック音楽専用ホール

当合唱団としては初めての使用の「府中の森芸術劇場 ウィーンホール」(京王線「東府中」駅下車)。定評の音響性能をお楽しみに。ご来場をお待ちします。



第111回定期演奏会

～3.11 被災地に贈る、バッハのクリスマス音楽の花束～

[日時] 2014年12月13日(土)、19:00開演

(開場18:30、終了21:00頃)

[会場] 府中の森芸術劇場 ウィーンホール

[交通] 京王線「東府中」駅北口、徒歩7分

[曲目] J.S. バッハ(日本語演奏)

- ・《マニフィカト》4つの挿入曲
- ・カンタータ第97番《わがすべてのわざ 主に導かる》
- ・カンタータ第62番《いざ来たりませ 世の救い主》
- ・カンタータ第36番《喜びのぼれ いと高き星に》

[演奏]

光野孝子(ソプラノ)、佐々木まり子(アルト)

鳥海 寮(テノール)、山本悠尋(バス)

草間美也子(オルガン)、東京カンタータ室内管弦楽団

大村恵美子(指揮/訳詞)、東京バッハ合唱団

[チケット]

全席自由席 3500円(当日4000円)

取扱い：合唱団事務局(チケット発売中)

宮田光雄・著

『バルメン宣言の政治学』

(新教出版社、2014 年 6 月 30 日発行)

「積極的平和主義」というデマゴギーに
立ち向かうには？

大村 恵美子 (主宰者)

私は東京バツハ合唱団という、西洋音楽の作曲家 J・S・バッハの作品を専一に演奏する団体の、創立・主宰者です。そのような者が、6 月号月報にひきつづき、7 月号にまで、おなじ宮田光雄氏 (ヨーロッパ思想史専攻) の著書 (ブックレット) を紹介しようとするのは、音楽同好団体の本質を逸脱したものではないのか、という懸念の声がかえりてきそうです。

しかし、当の政治家や宗教家のプロの方々、たいがい右顧左眄、自分の発言のタイミングや表現などの影響に神経を使っているあいだに、表現者である音楽家、画家、文人などが、堰を切ったように現状への危惧を訴えることは、よくあります。私の関心をよせている反戦市民の会でも、多くの学者や弁護士がメンバーに加わるのは当然として、芸能人や演劇・映画関係の方々も意外に活発に会をささえています。時代の主張は、ルネサンス期のフィレンツェなどを挙げるまでもなく、当の時代に実際に実務をになった政・経・商などのリーダーたちの名前は消えても、かれらが金をそそいで注文した芸術家の作品として、末代まで残って、その時代を後世の一般人たちに、直覚的に伝えているものです。

ここまでは、私が、この戦後日本の急カーヴの時点で、いっけん音楽とは無関係のような話題にこだわる言いわけなのですが、世紀の変わり目ごろから、宮田光雄先生とは、深いお交わりをさせていただけるようになりました。私たちが何度かドイツ演奏旅行にゆくときも、先生はお手紙や御著書のプレゼントなどで、旅行のはっきりとした意義づけで励ましてくださいました。

21 世紀は、20 世紀に輪をかけたような殺戮の時代となる気配で、今では多くの、これまで頼りにしていた世界のオピニオンリーダーたちが、次々に「人類の愚かさは変わらない」「第二次世界大戦では足りず、いつでも次々と大戦が始まり、核戦争も避けられない」などと、弱音と悲鳴をあちらこちらに書き立てています。地球の天候も、年ごとに新しい現象で荒れ狂って来ています。

*

さて、宮田先生は、『われ反抗す、ゆえにわれら在り』を、岩波ブックレットとして、本年 6 月 4 日に発行なさり、私にもご恵贈くださいましたが、私がまさにタイムリーな心の支えと感じて、全合唱団員と一緒に読ませていただいたことをお知らせしますと、さっそくに、初版の発行が 6 月 30 日となっている、もう一冊の新刊ブックレットを送ってくださいました。

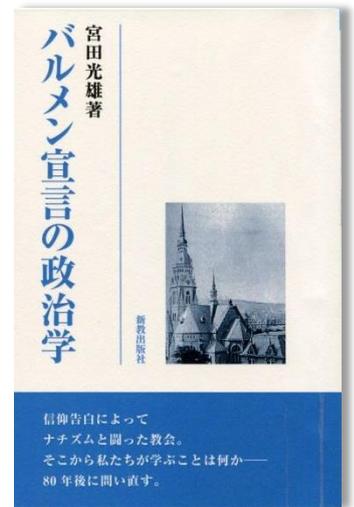
宮田光雄著『バルメン宣言の政治学』(新教出版社、2014 年 6 月 30 日発行。B6 判・56 頁、本体 500 円)。

今これを書き出しているのが 6 月 18 日ですから、発行予定日よりもずいぶん早くにいただけたわけです。今回私は、4 月 26 日に東京でなされた講演 [※「バルメン宣言」および、当講演については、この稿の末尾をご参照ください: 編集者註] がもともになっていると記された、このご本の内容を読んで、6 月号で紹介させていただいたものよりもっと具体的に今の日本の危険な状況を気づかせていただけるのではないかと思います。そして、だんだん希少価値となりつつある戦時体制体験者のひとりとして、2 号つづけてではありますが、もう一度、宮田先生から教えを得たいと思いました。

かねがね憂慮していることですが、わが国では、キリスト教に関することとなると、一般にまず文化として眺め、宗教や政治に深くかかわる地上のかけ引きとは別の、スマートで垢抜けした、上流の生活を仰ぎ見るような姿勢で対するのではないのでしょうか。敗戦直後の進駐軍支配下の東京でも、きらびやかなアメリカ映画と同時に、心をなでるような讃美歌にみだされたキリスト教会のなかに、たくさんの若者たちが吸いこまれてゆき、第九交響曲とメサイアが年末にひびきわたるようになりました。

その割には、宗教としてのキリスト教は深くは根づかず、もっぱら結婚式場の明るさを提供するのが教会の役割となったようです。私がおそれるのは、そこです。この新刊『バルメン宣言……』とはいったい何か？ 同じ敗戦国でありながら、今やヨーロッパのトップの実力者として、ユーロ体制を支えてきたドイツ。それに比して、ODA 援助などばかりの関係で、発展途上国に接し、隣国とは無人島の帰属問題などで腕白小僧どうしのレベルの喧嘩を長びかせ、戦後の長期にわたって、殺しも、殺されもしない唯一の安心な国という信頼さえも、みずから投げ捨てようとした、無気味な日本。和を重んじるやさしさ、おもてなしの奥には、何がひそんでいるのかと警戒されだした国家。

そんな今、キリスト教と国家神道や天皇制との関係はどうなるのか、という根源的な問題に目を向けさせ



よう、考え抜こうとする良心は、それこそ特定秘密保護法で、だまって消し去られるのではないだろうか。

彼〔ヒトラー〕が『卓上語録』の中で将来的理想として思い描いていたのは、日本の天皇制をモデルにした国家宗教だったようです。「天皇は、日本人の宗教全体の支配者である。国民の〔精神の〕指導と政治の指導とは、一個の人格の内に一体化されていなければならないのだ」と。

(宮田著 p. 18)

日本とはちがい、キリスト教会とは、ドイツにとっては一般人の一般生活そのもののことだったのです。バルメン宣言という、耳馴れないむずかしそうな話も、国をあげて戦争に向かわせた偽指導者と一般の国民との——教会だけではない——全面戦争の記録なのです。キリスト教がかみ合わさると、何もかもよそごとのきれいごとになって、自分たちの本質的な関心にまではならない。

こういう文化と世相を相手として、私たち、バッハ合唱団も、挑戦を半世紀つづけてきたのです。歌詞がドイツ語なら、西洋の高級芸術だから喜んで聞き、歌う。日本語訳詞がつくと、歌の内容がキリスト教のPRだとわかるから、敬遠するか、軽蔑する。そういうことの連続でした。このままでゆけば、外国の宗教も社会も哲学も遠いままで、自国の低級な愛国者・国家主義者らに、それこそヒトラーの場合のように、みごとにのっとられて、世界の鼻つまみ存在にさえなりかねません。目を覚まして、心からの真摯な歌を高唱しましょう！

※) 編集者註：

「バルメン宣言は 1934 年、ナチス政権とそれに迎合する教会内勢力と戦うため、ドイツ国内のルター派と改革派、合同派が一致して採択した信仰告白。トーマス・ブライトとハンス・アスムッセンの協力のもと、主としてカール・バルトが起草し、ドイツ教会闘争の神学的根拠となった。」

メールマガジン CHRISTIAN TODAY 「宮田光雄氏がバルメン宣言を解説『キリストの福音に立ち返るほかない』新教出版社創立 70 周年記念講演」より引用。

<http://www.christiantoday.co.jp/articles/13204/20140428/shinkyoy-pb-70th-lecture.htm> 講演の概要についても、上記メルマガでご参照いただけます。

■次回公演の使用楽譜 (2 点同時発行)

「カンタータ第 62 番《いざ来たりませ 世の救い主》」

「カンタータ第 97 番《わがすべてのわざ 主に導かる》」



【発行】
2014 年 5 月 30 日
【体裁】
A4 判・36 ページ
【本体価格】
各 1900 円

◇ご希望の方、事務局までお申し込みください。

バッハ・カンタータと教会暦の聖句一覧 ⑬

<p>BWV 135 《憐れむべき 罪人われを》(初演 1724) Ach Herr, mich armen Sünder 【教会暦】三位一体節後第 3 日曜日(他に=BWV 21) [書簡]1 ペトロ 5:6-11. BWV 21 に同じ。 [福音書]ルカ 15:1-10。(同上)</p>
<p>BWV 136 《主よ わが念い 知りたまえ》(1723) Erforsche mich, Gott, und erfahre mein Herz 【教会暦】三位一体節後第 8 日曜日(=BWV 45, 178) [書簡]ローマ 8:12-17. BWV 45 に同じ。 [福音書]マタイ 7:15-23。(同上)</p>
<p>BWV 137 《頌めよ主を 強き栄えの君を》(1725) Lobe den Herren, den mächtigen König der Ehren 【教会暦】三位一体節後第 12 日曜日(=BWV 35, 69a) [書簡]2 コリント 3:4-11. BWV 35 に同じ。 [福音書]マルコ 7:31-37。(同上)</p>
<p>BWV 138 《なにゆえ わが魂うなだるや》(1723) Warum betrübst du dich, mein Herz? 【教会暦】三位一体節後第 15 日曜日(=BWV 51, 99) [書簡]ガラテヤ 5:25-6:10. BWV 51 に同じ。 [福音書]マタイ 6:24-34。(同上)</p>
<p>BWV 139 《幸いなるかな 幼な児のごとく》(1724) Wohl dem, der sich auf seinen Gott 【教会暦】三位一体節後第 23 日曜日(=BWV 52, 163) [書簡]フィリピ 3:17-21. BWV 52 に同じ。 [福音書]マタイ 22:15-22。(同上)</p>
<p>BWV 140 《目覚めよと呼ばわる ものみの声高し》(1731) Wachet auf, ruft uns die Stimme 【教会暦】三位一体節後第 27 日曜日 [書簡]1 テサロニケ 5:1-11. 盗人が夜やってくるように、主の日は来る…。目を覚まし、身を慎んでいきましょう。 [福音書]マタイ 25:1-13。「十人のおとめ」の喩え。十人のおとめがそれぞれともし火を持って、花婿を迎えに出ていく…。</p>
<p>BWV 141 <偽作> (テレマン)</p>
<p>BWV 142 <偽作> (クーナウ?)</p>
<p>BWV 143 《頌めよ主を わが魂》II (1708-14) Lobe den Herrn, meine Seele 【教会暦】新年(=BWV 16, 41, 171, 190) [書簡]ガラテヤ 3:23-29. BWV 16 に同じ。 [福音書]ルカ 2:21。(同上)</p>
<p>BWV 144 《去りゆけ おのが分とりて》(1724) Nimm, was dein ist, und gehe hin 【教会暦】復活節前第 9 日曜日(Septuagesimae)(=BWV 84, 92) [書簡]1 コリント 9:24-10:5. BWV 84 に同じ。 [福音書]マタイ 20:1-16。(同上)</p>
<p>BWV 145 《われは生く ながために》(1729?) Ich lebe, mein Herze, zu deinem Ergötzen 【教会暦】復活節第 3 祝日(=BWV 134, 158) [書簡]使徒 13:26-33. BWV 134 に同じ。 [福音書]ルカ 24:36-47。(同上)</p>
<p>BWV 146 《あまたの苦しみをへて入るべし》(1726) Wir müssen durch viel Trübsal 【教会暦】復活節後第 3 日曜日(=BWV 12, 103) [書簡]1 ペトロ 2:11-20. BWV 12 に同じ。 [福音書]ヨハネ 16:16-23。(同上)</p>
<p>BWV 147 《心と 日々のわざもて》(1723、原曲 BWV147a は 1716) Herz und Mund und Tat und Leben 【教会暦】マリヤのエリサベツ訪問の祝日(7.2 固定)(=BWV 10) [(書簡)]イザヤ 11:1-5. BWV 10 に同じ。(参考 BWV 243) [福音書]ルカ 1:39-56。(同上。マリヤの讃歌=マニフィカト)</p>
<p>BWV 148 《み名の栄光を讃えよ》(1723) Bringet dem Herrn Ehre seines Namens 【教会暦】三位一体節後第 17 日曜日(=BWV 47, 114) [書簡]エフェソ 4:1-6. BWV 47 に同じ。 [福音書]ルカ 14:1-11。(同上)</p>